

平成 23 年 3 月 4 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20720114

研究課題名（和文） 甲骨文字における商代の聖職者に関する総合的研究

研究課題名（英文）

研究代表者

陳 捷（CH'EN Chieh）

立命館大学・文学部・講師

研究者番号：10469182

研究成果の概要（和文）：

本研究は、甲骨文字そのものを分析することによって、商代における諸種の聖職者を中國文化史の中に位置づけて、その系統と變遷を究明した。とりわけ聖職者によるトと筮の共通點と相違點をそれぞれまとめて考察を加え、古代中國のトと筮は、密接に関わりながら緩やかに發展していったことを明らかにした。また、それらの共通點と相違點が、夏・商・周の三代を跨ってある程度一貫性が見られることを詳しく論じた。

研究成果の概要（英文）：

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：甲骨学、中国文字学、中国古代史

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：甲骨文字、商代、聖職者、ト、筮

## 1. 研究開始当初の背景

中國の商代後期（前14～前11世紀）の甲骨文字は、現在知られているうちでは最も古い系統性のある漢字である。解讀の結果、その刻辭は商王朝の聖職者であるト官によって行われるトいの内容と結果を記したものであることが判明した。漢字の最も古い祖型を示すところから、漢字研究の根本資料であると同

時に、商王朝の日常行事についてのト占記録であることから、商代史とりわけ商代信仰の諸相を解明するための無二の史料でもあって、この大量の資料の研究上の價値は計り知れないものがある。

甲骨文字が発見されて百年あまりの間、甲骨學の研究は學界の注目を集める多大の成果を上げた。うちの文字の解讀やト辭の斷代、

また制度の復元などについて活発な論争が展開されてきたのに対して、商代の聖職者については、断片的な個別研究はあるものの、文化史の立場からの全面的な研究は未だ不十分であり、次のような解明すべき問題が多く残されている。

(1) 先行研究の成果として、陳夢家氏の「商代的神話與巫術」(1936年)、貝塚茂樹氏「龜卜と筮」(1947年)、加藤常賢氏の「巫祝考」(1955年)、饒宗頤氏の『殷代貞卜人物通考』(1959年)、張光直氏の「商代的神話與巫術」(1987年)などが挙げられるが、いずれも個別研究の代表作であって、未だ商代聖職者の特質を体系的に解明しておらず、その變遷についても十分な研究がなされていない。

(2) 上記研究のうち、陳夢家氏・張光直氏は「巫」について、貝塚茂樹氏・饒宗頤氏は「卜」について、加藤常賢氏は「巫」と「祝」との両方について考察したが、異なる聖職者の關聯性と多様性については殆ど研究されていない。

(3) 甲骨の資料を使う際に、上記研究の殆どがごく一部の擧例にとどまっているので、甲骨卜辭という貴重な一次史料が十分に利用されていない。饒宗頤氏だけはそれまでの關聯卜辭を網羅して検討したが、しかしそれから今日まで約50年が経って、多くの甲骨が出土して公表されてきたので、それによって饒氏の説を補足することが必要となった。全ての關聯卜辭を把握しない限り、商代聖職者の全容を解明することができない。

近年、甲骨文字の解讀や斷代、制度史などの研究が急速に進んでおり、また考古學とりわけ遺跡の發掘調査が盛んに行われている。それらの成果によって各種の新しい知見が得られるようになり、商代の複雑な信仰世界に關する全面的でより深い研究がようやく可能となった。そこで、本研究で商代諸種の

聖職者を取り上げ、全ての關聯卜辭を調べて全面的な研究を行ってゆきたいと考えている。

私はこれまで主として中國文字の特質及び中國文字文化史に關する綜合的研究を行ってきた。博士後期課程に進學してからは甲骨文字を主要な研究對象として、引き続き文化史の立場から文字と信仰との關係を解明していこうとする。私は神權・王權と文化の相互關係を中心に、とりわけ神權政治における歷代商王の實像をめぐって研究し、新しい知見と独自の論點を提示してきた。商代信仰の全容を解明するために、最高の聖職者であった商王の研究に止まらず、更にそれぞれの役割を擔っていた諸種の聖職者について考察することが必要である。

また2004年以降、陝西省岐山縣にある周公廟遺跡で、大規模な考古學調査が行われてきた結果、西周時代の大規模な城壁・陵墓群だけではなく、約700點の甲骨も發見された。420あまりの甲骨文字が確認されたほか、初めて「周公」という文字のある甲骨も4點見つけた。現在發掘中の周公廟遺跡は、殷墟以來の大發見とも言われるほど貴重かつ大規模なものであり、その甲骨は近い將來に公表される豫定である。聖職者のことを熟知していた周公が関わっているこれらの甲骨には、聖職者關聯の記録が少なからず含まれているので、それをいち早く正確に解讀・研究するためにも、まず商代聖職者の實態という重要な研究課題について緊急に検討すべきである。

## 2. 研究の目的

本研究は、「甲骨文字における商代の聖職者に關する綜合的研究」を課題として、甲骨文字そのものを分析することによって、商代における諸種の聖職者を中國文化史の中に位置づけて、その系統と變遷を究明すること

を目的とする。具体的には以下のとおりである。

(1)主としてト占を擔當するトや筮をはじめとする諸種の聖職者の實態を総合的に解明する。甲骨文字の字形やト辭の斷代の綿密な考察に基づいて、幅広く商代文化全般を視野に入れ、その信仰の源流にも遡りつつ、多面的に考察する。

(2)商代信仰におけるシャーマニズムの様相を探る。東西文明の異同を十分に視野に入れ、商代のシャーマニズムに関する疑問點の解明を試みながら、廣く中國文化史全體の基礎の上に据えて商代のシャーマニズムの様相を明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究は、甲骨文字そのものを分析することによって、商代における諸種の聖職者を中國文化史の中に位置づけて、その系統と變遷を究明することを目的とする。この目的を達成するために、商代諸種の聖職者に関する甲骨ト辭を五つの時期に分け、時代の流れに沿ってその歴史的展開を追うという方法を採用する。

まず研究資料の収集から始めて、先行研究の成果を廣く集め、深く理解し、正確に把握する。『甲骨文合集』・『小屯南地甲骨』・『英國所藏甲骨集』・『甲骨文合集補編』・『殷墟花園莊東地甲骨』などの甲骨著録書を丹念に調べ、商代の聖職者に關聯する全てのト辭を抽出して、データベースの基本資料を蓄積する。出來合いの釋文には吟味すべきところがかかりあるので、それをそのまま使用するのではなく、拓本を参照しながら釋文を整理し、最新の研究成果によって必要な修正を行う。また同一の甲骨が複数の書物に収録されている場合、相互關係を正確に把握する必要がある。この作業は、従來、研究者によって散發的に行われてきたが、本研究においてはそ

れを全面的に漏れなく行い、全ての出典を示しておく。このように關聯ト辭を網羅して、正確な釋文を作り、しかるべき出典を詳しく挙げ、商代の聖職者に關するデータベースを構築する。また、中國各地の博物館・研究施設を訪問し、資料の収集・調査を行い、甲骨文字の實物や關聯文獻を研究し、コンピュータによって整理を進めながら、論文作成の諸準備を整える。

そして従來の文獻について、前世紀において文獻批判が盛んに行われ、古代文獻を必要以上に疑う傾向に陥っていたが、近年に至ってかつて過小評價された文獻の價値を數多くの出土資料によって見直す研究がなされるようになり、中國古典學が新しい局面を迎えつつある。本研究はこのような最新の研究成果を積極的に取り入れ、關聯する文獻資料を精査した上で、綿密な考證を行い、慎重に取捨選擇することに努める。

本研究はこのように文獻資料を幅広く検討しつつ、常に甲骨ト辭と照合することによって考察を進めてゆく。

### 4. 研究成果

商代の信仰世界では、神意を伺うために用いられた二大手段として、聖職者によるトと筮が密接に關わっていた。トと筮の両者が具體的にどのような關係にあったかについて、文獻資料に止まらず、甲骨ト辭を取り上げて明らかにする必要がある。本研究は、先行研究の成果を踏まえた上で、周代ト筮の關係を出發點とし、商周兩王朝の歴史的變化にも留意しつつ、従來の文獻の精査、甲骨ト辭との對照によって商代におけるトと筮の關係を探究するものである。

まずトと筮の共通點について考察する。トに使う甲骨と筮に使う蓍はいずれも靈的媒介物であることを指摘し、長命である龜や蓍には、神と人の間に介在して未來の吉凶を傳

える神秘的能力と重要な役割があり、また祭祀儀禮の中で神聖化された牛の肩胛骨をはじめとする獸骨も同様の靈力を持つものと考えられたことを論じる。商代にはトと筮が併用されており、後の周王朝もこの制度を繼承し、理論化して發展させていったことを確認し、ト筮の併用が夏代に遡る可能性について詳しく検討する。

次いでトと筮の相違点について、官制・對象・順序・權威・本質などの面から分析し、以下の結論を得た。一、トの擔當機關は筮のそれに比べて、壓倒的な規模を誇るものである。二、筮は一般事項を扱うのに對して、トは重要事項を扱う。三、重要事項を決めるため、トと筮が相次いで行われる。四、矛盾が生じた場合、筮よりトの結果が優先される。五、原始的な形象によって豫告するトが、派生的な數字によって豫告する筮と本質的に異なるため、トは筮より信憑性の高いものとされる。

本研究では、聖職者によるトと筮の共通点と相違点をそれぞれまとめて考察を加え、古代中國のトと筮は、密接に関わりながら緩やかに發展していったことを明らかにした。また、それらの共通点と相違点が、夏・商・周の三代を跨ってある程度一貫性が見られることを詳しく論じた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

陳捷、「商代におけるト筮の關係」、『人間・環境学』、査読有、第17巻、2008年12月、頁107-117

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

陳捷 (CH'EN Chieh)  
立命館大学・文学部・講師  
研究者番号：10469182

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：